

AIと大学

信金中金月報掲載論文編集委員

永田 邦和

(長野県立大学 グローバルマネジメント学部教授)

大学生がAIを利用してレポートや卒業論文を書いているという噂は、読者の皆さんも聞いたことがあると思います。就職活動でもAIでエントリーシートを作成する学生が増えてきたので、書類選考を廃止し、面接を重視する企業も増えてきました。同僚や他大学の教員と話すと、学生のAI利用が話題に上ることも多くなりました。ある先生からは、学生の発想力を調べるための課題を出したところ、AIで調べてきたからなのか、同じような内容のものが多かったと聞きました。学生としては、発想力をアピールするよりも、正解（と思われるもの）を示したかったようです。良いレポートだと思ったら、後でAIを使って書いたということが分かったりするので、良いレポートを読んだときに、「自分で書いたのか」と疑心暗鬼になってしまうこともあります。別の先生の話では、学生に質問をしたら、「AIが、そのように言っていました」と回答されたそうです。本当かどうかは分かりませんが、先生の前でスマートフォンを取り出し、AIを使って調べる強者もいるそうです。

人文・社会科学系の学部では、問いを立て、その答えを導くことが教育の基本ですので、AIで安易に答えを導出すると、学生の論理的な思考力を養えません。このような状況ですので、日本では、多くの大学がAIの使用に注意を与えたり、禁止したりしています。しかし、中国では、積極的にAIを使っている大学もあります。昨年、中国の大学に講演に行った方の話しを聞く機会があったのですが、その大学は有料版の高性能のAIを契約し、教職員だけでなく、学生も使っているようです。学生時代にAIを使うことで、卒業後にAIを仕事で使いこなすことができ、それが最先端技術の開発につながります。その方は、中国ではAIを利用した自動運転の車が普及していることに衝撃を受け、日本では、大学がAIを禁止しているので、技術開発が遅れるのではないかと心配していました。

新しい技術が普及すると、その技術と大学（特に、人文・社会科学系学部）が良い関係を築くまでには時間が掛かります。筆者が大学教員になったのは2001年ですが、ちょうど、インターネットで世界中の資料を簡単に入手できるようになりました。キーワードを入力すれば、関連する資料を簡単に探せるようになり、ファイルもダウンロードできるようになりました。知らない用語も検索サイトで簡単に調べられるようになりました。研究面で

は良いことばかりですが、教育面では、コピペ（コピー＆ペースト）で書いたレポートが増えてきました。検索結果の上位のホームページを複数コピーして、ワープロに貼り付けて、書式を整えて完成させるというやり方です。これでは、教育効果がないだけでなく、著作権を侵害することになります。この頃から、大学では「剽窃（ひょうせつ）」という言葉が良く使われるようになり、剽窃もカンニングと同様に処分されるようになりました。

不正行為として処分するだけでなく、多くの大学で、1年次に、大学での学びやレポートの書き方等を教えるようになりました。授業では、問いを立てて、答えを導くことも教えていますので、「問いと答え」という言葉も良く使われるようになりました。また、独自の新しい答えが求められるようになりました。学生は新しい答えを出せるように努力しており、興味深いレポートや卒業論文も増えてきました。それでも、コピペのレポートはありますが、多くの大学で、インターネットが日常的に使われる時代に合った教育ができるようになりました。

AIの普及のスピードは予想以上に速いので、新しい課題に直面しています。AIを使えば、自分で資料を読み込み、一生懸命に考えなくても、問いに対する答えが簡単に得られます。しかし、AIは時々誤った回答をしますので、必ずしも正解を示してくれません。AIに書かせた文章が正しいかどうかを判断するためには、その分野の基礎的な知識や、論理展開を確認できる思考力が必要になります。また、AIでは膨大な資料から答えを導いてもらえますが、それらの資料は誰かの著作物です。AIを利用しても、他人と同じ答えしか得られませんので、自分のオリジナルな答えを出すには、AIを超える必要があります。論理的な思考力だけでなく、発想力も求められるようになります。AIと大学教育が良い関係を築くことができれば、新しい能力を身に付けた優秀な学生を社会に送り出すことができます。

これまで、学生がAIを正しく利用していない事例を述べてきましたが、もちろん、多くの学生は正しく利用しています。最近、AIで英文を添削することができますので、学生の英語の発表も格段に上達しました。AIで添削すると、文法の誤りが修正されるだけでなく、日本語の独特の表現や専門用語も正しく翻訳してもらえます。学生は、翻訳した英文を何度も読み込んでから発表するので、良い発表が増えてきました。自信を持って発表できるので、英語での補足説明もアドリブでできるようになりました。新しい技術が出てくると、教員も学生も振り回され、試行錯誤を繰り返しますが、最終的には、良いところに落ち着くようです。それが、より良い社会につながるように、筆者も試行錯誤を繰り返していきます。